

2024年度 一般選抜問題
前期C日程 2024年1月23日(火)

選 択 科 目

(数学・基礎理科・物理・化学・生物・日本史・世界史・国語)

数 学	1～ 6ページ
基礎理科	7～ 27ページ
※2科目選択して1科目の扱いとなります。	
物 理	29～ 44ページ
化 学	45～ 57ページ
生 物	59～ 73ページ
日 本 史	75～ 85ページ
世 界 史	87～ 99ページ
国 語	101～113ページ

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 3科目型の受験生および3科目型と2科目型を併願する受験生は上記の科目から2科目を、2科目型の受験生は、上記科目と英語から2科目を選択してください。但し受験票に記載された科目以外を受験すると0点となります。
3. 解答用紙には、「**数学**」(青色)と「**基礎理科**」(赤色)と「**数学・基礎理科以外**」(赤色)の3種類があります。
4. 試験開始後、解答用紙に受験番号と名前を必ず記入し、受験番号をマークしてください。数学以外の科目については、解答する科目を選び、科目の右にマークしてください。また解答科目欄に科目名を記入してください。正しくマークされていない場合は0点となります。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄にマークしてください。「**基礎理科**」の解答用紙は2科目を選択し、科目ごとに決められた解答欄にマークしてください。3科目に解答した場合は0点となります。
6. 問題用紙の余白は計算に使用してもかまいませんが、解答用紙を汚してはいけません。
7. 試験開始後、問題用紙・解答用紙に落丁・損傷がないか確認してください。
8. 数学の問題の冒頭には「**解答上の注意**」が記入されていますので、必ず読んでから解答してください。
9. 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

国語

1 次の問い（問1～4）に答えなさい。

問1 ア～エの傍線部のカタカナに相当する漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア ヒソウな決意で異国の地に旅立つ。 1

① 先輩のソウコウ会を開催する。

② ソウチョウな雰囲気に居住まいを正す。

③ 犯人の行方をソウサクする。

④ ソウイと工夫で難局を乗り切る。

イ 過労にキインする体調不良のようだ。 2

① 市役所にコンイン届を提出する。

② インウツな気分で街を歩く。

③ インネンが深いライバルチームとの試合に熱くなる。

④ 家業を子どもに譲ってインキヨする。

ウ 実態を知ってゲンメツする。 3

① ヘンゲン自在の芸に魅了される。

② キンゲンな態度で儀式に臨む。

③ キョクゲンの状況に身を置く。

④ インフラ整備のためのザイゲンを確保する。

エ 再会できた喜びに固いホウヨウを交わす。 4

① 母が日本ブヨウの名取になる。

② 著名な文化人を市長候補にヨウリツする。

③ 能好きが高じてヨウキョクを学ぶことにした。

④ 森のヨウセイが登場するファンタジーを読む。

問2 ア・イの四字熟語の空欄 5、6 に入る漢字を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 暗中模 5

① 策 ② 錯 ③ 索 ④ 作

イ 堅 6 不拔

① 認 ② 任 ③ 妊 ④ 忍

問3 ア～ウの慣用表現の空欄 7、8、9 に入る漢字を、次の①～⑨の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 株を守りて 7 を待つ

イ 小人閑居して不 8 をなす

ウ 燕 9 いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや

① 雀 ② 全 ③ 時 ④ 完 ⑤ 当

⑥ 兎 ⑦ 善 ⑧ 明 ⑨ 間

問4 ア～ウに該当するものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

10、11、12

ア 安岡章太郎の著作 10

① 『坂の上の雲』 ② 『家族シネマ』 ③ 『蟬しぐれ』

④ 『海辺の光景』

イ 内向の世代でない小説家 11

① 阿部昭 ② 黒井千次 ③ 古井由吉 ④ 国木田独歩

ウ 瀬戸内寂聴『晴美』の著作 12

① 『大地の子』 ② 『高野聖』 ③ 『おとうと』 ④ 『夏の終り』

② 次の〈文章Ⅰ〉と〈文章Ⅱ〉を読んで、後の問い(問1～6)に答えなさい。

〈文章Ⅰ〉

体験者が自分の語りを誰かに聴いてほしいと欲するのは、当然のことだろう。自分の傷や苦痛をまなざしてほしい、それを語る声に耳を傾けてほしい、できることなら、自分が傷や苦痛を受けているというこのリアリティを分かち合ってほしいと欲するのも、ごく自然なことだろう。その際、語る人が、聴く人からの共感や理解が得られやすくなるよう、聴く人にとって受け入れやすい言葉や筋書きをつい選んでしまうことがあるとしても、けっしておかしくはない。

他方また、語る人自身も、他者の傷や苦痛に傷つきやすいひとりの人間である。そうだとすれば、眼前の他者が自分の語りを聴いて傷つき苦悩しているのを見て、その傷や苦悩を和らげるために何かできないか、と考えたとしても不思議ではない。出来事の記憶を再生や克服といった希望のある物語として筋立てることで、聴く人が安心し、その傷や苦悩が和らぐならば、そのような筋立ての物語を——たとえ、それが生じた出来事そのものからはズレていたとしても——語る人が聴く人にあえて贈与するということもあるのかもしれない。

(a)

出来事の記憶の物語は、ただ語られるだけではなく、誰かに聴かれることで初めて完了する。その際、語る人と聴く人の間に共感や共通理解が生まれるとしたら、それは双方にとって喜び以外の何ものでもないだろう。だが、その喜びを欲するあまりに、わかりやすい言葉や筋立てが優先的に選択されるとしたら、そこには——たとえ、誰が意図したのではなくても——いまここにはない、実際にはありもしない「現実」が生まれるかもしれない。

〈文章Ⅱ〉

破壊的・暴力的な出来事の体験者がその記憶を語るとき、その語りに耳を傾けようとすることは、ひとり孤独に苦悩する体験者の苦痛をまなざそうとすること、そして、その苦痛に寄り添おうとすることに他ならない。これは、他者を孤独に苦悩するままには放置しておかない、という倫理的な営みである。

だからこそ、まずは、聴くという営みが体験者にさらなる苦痛を与えたり体験者をさらに深い孤独に追いやったりする事態は、可能なかぎり避けられるのがよいだろう。そのためには、聴く人が体験者の記憶を「自分のものにする／横領する」ことがないよう、注意深く (carefully) 体験者の語りに耳を傾けることが重要である。

(b)

ここで注目したいのは、「自分のものにする／横領する」ことが容易にはかなわないような、言語を絶するもの、言語を超えたものである。体験者の語りは、実のところ、言語化できることのみで構成されているわけではない。言いよどみ、言い間違い、言い直し、つぶやき、沈黙、ため息、呻吟、視線のゆらぎ、身体や声の震え、時として潤色。これらのすべてが体験者の語りを構成している。だとすれば、言語化された内容だけではなく、筆舌に尽くすとかえってその意味合いが失われたり損なわれたりするような言語を絶するもの、言語を超えたものも含めて、むしろ、それらにこそ注意／配慮 (care)しながら体験者の語りに耳を傾けることが重要なのではないか。換言するならば、X 注意／配慮が向けられる必要がある。

語ることの不可能性や困難さに対するこの注意／配慮とは、むしろ、出来事の記憶を語られないままにただ放置しておくことではない。ましてや、語り尽くすまで語り続けるよう、体験者を促したり支援したりすることもできない。それは、言語化された語りの背後に潜在するたくさんの方々の言語化されないものや言語化されえないものに思いを馳せることをさす。

(c)

出来事の記憶が語られるのを聴くときに言語化されないものや言語化されえないものに思いを馳せるという行為は、かつて知覚したものを再現する想起の営みとは異なる。それは、いまだかつて知覚したことのないものを構想するという営みである。いまだないものとはいえ、むしろ、完全に自由に創造されるわけでも、恣意的に想像されるわけでもない。それは、いまここに現象している言語化されたことや沈黙、ため息、声の震えなどを手がかりとして、またそれらを(注)結節環として、「もはやないもの(過去の出来事)」と「いまだないもの(出来事の記憶の総体)」とをそれぞれ、かつ相互に結びつけつつ、いまここで形象するという営みである。この意味で、体験者の語りを聴くという行為は、倫理的であるというだけではなく、同時に美的な営みでもあるといえる。

体験者の語りを聴くという行為がこのような美的な営みであるならば、私たちにはやはり「物語」が必要不可欠となる。ある人の過去の出来事の体験も、その出来事の記憶の総体も、その正体が何かと問われるなら、明解な正解のない「謎」だと答えるしかないだろう。あるいは、正解が無数にある謎だと答えることも可能かもしれない。ある人が、その謎をある一つの「物語」へと形象としよう。

その「物語」を「語り―聴く」とは、謎というものを言語によって語る行為であるのと同時に、言語化された「物語」から削ぎ落とされたもの、こぼれ落ちたもの、言語化されないもの、言語化されえないものが語る、その声なき声に耳を傾ける行為である。謎は、語られるたび、聴かれるたびに異なる「物語」として形象られるだろう。なぜなら、それは、「語られ―聴かれる」そのたびに、その語る人、その聴く人にとって切実な仕方で、注意深く形象られるものであり、構想されるものだからである。

B 「物語」をこのように美的に「語り―聴く」ことこそ、すなわち、災害という出来事が人間にとっていかなるものであり、その出来事を人間がどのように生きるのか、という問い―謎に迫りうる、おそらくは唯一の技法であると思われる。

(d)

Y 日常生活を、秩序だった、安心のできる、生命と光に充ちた世界だとするならば、そこに突然、襲来する災害は、混沌とした、鬼気迫る、死臭の漂う闇の世界に喩えることができるだろう。日常生活をつつがなく送っているとき、私たちは、この闇の世界が隣り合わせにあることをすっかり忘れてしまっている。だが、ただ意識も知覚もされていないだけで、それは、つつがなく日常生活を送る私たちとつねに共に在る現実である。(注)柳田國男は、これを「隠れた現実」と呼んだ。「我々が空想で描いて見る世界よりも、隠れた現実の方が遥かに物深い。また我々をして考えしめる」。物深い隠れた現実とは、「物語」を媒介としてのみ形象られる。そして、形象られたその「物語」を「語り―聴く」なかで、人は、死とつねにすでに隣り合わせにある人間の生のあり様について、また、人間が生まれ、生きて、死ぬという営みを切実に遂行しくり返すこの世界のあり様について、その物深さに戦慄しながら考える。災害もまた、物深い隠れた現実である。私たちは、そのような災害の記憶の「物語」を「語り―聴く」ことを通して、災害と隣り合わせにある私たちの生活世界のあり様について、また、その世界のなかで生まれ、生きて、死ぬという私たちの切実な生(と死)のあり様について、その物深さに戦慄しながら考えるのである。

このような思考が可能になるのは、「物語」を「語り―聴く」際に、語られたことや語りうることの

みではなく、むしろ、語ることの不可能性や困難さに聴く人の注意／配慮 (care) が向けられているからこそのある。このとき、語る人と聴く人は、出来事の記憶を語ることの不可能性と困難さを共有している。そうだとすれば、これは厳密には「共有」ではない。なぜなら、両者は、何も具体的・実体的なものごとを分かち合っていないからである。両者が分かち合っているのは、十全に語る事ができないという「無」であり、まったく同一の〈物語〉を〈語り―聴く〉ことができないという「無」であり、つまるところ出来事の記憶とは共約不可能なものなのだという「無」である。語る人と聴く人は、「無」それ自体を分かち合っている。これは、共有ではなく「分有」と呼ばれるあり様である。破壊的・暴力的な出来事の記憶は、語る人と聴く人との間で、共有されるのではなく、分有されるのだといえる。

(e) 出来事の記憶がこのように分有されるとき、語る人と聴く人との間には、ある共同体が形成されている。それは、共有するものをもたない人々の共同体、人々が「無」を分有する共同体である。

(文章Ⅰ) (文章Ⅱ) はともに山名淳・矢野智司編著 岡部美香『災害と厄災の記憶を伝える―教育学は何ができるのか』第五章による。なお、本文中に一部省略したところがある。

(注) 1 結節環―ここでは「二つのものを結び付ける輪のようなもの」といった意味。

2 柳田國男―一八七五―一九六二。日本の民俗学者。

問1 傍線部A「聴く人が体験者の記憶を『自分のものにする／横領する』とあるが、これは「聴く人」のどのような行為や態度のことか。(文章Ⅰ)の内容も踏まえて、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

13

- ① 破壊的・暴力的な出来事で苦しんでいるのは体験者本人であるのに、話者の苦痛を和らげるはずの立場を忘れて、体験談を聴くことで必要以上に傷つき苦悩してしまうこと。
- ② 体験者に起きた悲しい話を聴いているうちに、自分自身もかつて傷つき苦悩した経験があることを思い出し、いつしか自分が被害者だったかのような勘違いに陥ってしまうこと。
- ③ 意識的にせよ無意識にせよ、聴く人がいること自体が体験者の語りに介入していることを理解せず、体験者の実際の傷や苦痛そのものを理解できたように思ってしまうこと。
- ④ 自分の悲惨な体験が存分に伝わるように、体験者が不必要な情報を省いてわかりやすく語ってくれているのに、体験者の語りが出来事のすべてであるかのように誤解すること。
- ⑤ 体験者が自分の傷や苦痛を、聴く人の心情も慮りながら平易に話してくれているのに、理解力が足りないために、実際には存在しないストーリーを一方的に構築してしまうこと。

問2

本文中の空欄 X に当てはまる表現として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

14

- ① 聴覚で把握した内容だけではなく、むしろ、言語化され明確に文書で残されたものにこそ、聴く人の
- ② 言語化されて語られたことのみではなく、むしろ、語ろうにも語りえなかったことにこそ、語る人の
- ③ 語る人の言い間違いや言い直しだけではなく、むしろ、身体的な動作や時折の脚色にこそ、聴く人の
- ④ すべてを言語化してしまうのではなく、むしろ、身体の動きなど語る際の反応にこそ、語る人の
- ⑤ 語られたことや語りうることのみではなく、むしろ、語ることの不可能性や困難さにこそ、聴く人の

問3

傍線部B「〈物語〉をこのように美的に〈語り―聴く〉こと」とあるが、〈物語〉を〈語り―聴く〉行為や態度として適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

15

- ① 〈語り―聴く〉ことは言語化されないものにまで思いを馳せる行為だが、決して好き勝手な聴き方が許されているわけではない。
- ② 体験者の苦痛をありのままに理解したいと願うあまり、〈物語〉を語り尽くすよう要請したり、手助けしたりすることは慎むべきである。
- ③ 「謎」としか言いようのない過去の体験を、理性や善意とは別に、語られなかったことまで含めて形象かたどろうとすることは、美的な営みである。
- ④ 体験者の語りを聴く際、そこに何がしかの倫理的なものを見出みいだそうとする態度を捨て去ることではじめて、〈物語〉は美しいものとなる。
- ⑤ いったん体験者の中で〈物語〉が構築されたとしても、そこで語られていないことも読み取るうとすることが〈語り―聴く〉態度には求められる。

問4

形式段落Yで、筆者が柳田國男の考えを引用したことの論展開上の効果として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

16

- ① 筆者が「言語化されないもの」と呼ぶものは、柳田が日本の民俗を研究した時代から「隠れた現実」という姿で存在することを示し、その歴史的正当性を示す効果がある。
- ② 柳田の「物深く、考えしめる「隠れた現実」」の一つとして災害を提示することで、自らの「語り―聴く」行為のもつ意義についての主張を補強する効果がある。
- ③ 自身が〈語り―聴く〉行為の重要性を説くのは、聞き取りを通して「隠れた現実」に思い至った柳田に影響を受けたからであるという、筆者の思想的背景を示す効果がある。
- ④ 日本が誇る民俗学者である柳田が指摘する「隠れた現実」と、自身の考えに共通部分があると示すことで、大学者の権威を借りて筆者の主張の正当性の根拠とする効果がある。
- ⑤ 日常生活を災害が襲うことは、現代も柳田が存命だった時代も変わることはないという事実を読者に印象付けることで、筆者の主張に普遍性を示す効果がある。

問5 次の一文は、本文中の（ a ）～（ e ）のうち、どの部分に補うことができるか。最も
適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 17

では、このとき、私たちは、体験者の語りの何に対して、どのように注意深くあればよいの
だろうか。

①（ a ） ②（ b ） ③（ c ） ④（ d ） ⑤（ e ）

問6 高校生五人が〈文章Ⅰ〉と〈文章Ⅱ〉を読んで話し合った。〈文章Ⅰ〉と〈文章Ⅱ〉の内容
を踏まえた発言として**適当でないもの**を、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 18

① 生徒A…〈文章Ⅰ〉と〈文章Ⅱ〉の両方で「苦痛をまなざす」という表現が用いられてい
ます。この表現は、「耳を傾ける」とセットで用いられていて、単に「見る」の
ではなく、「目を向ける」というように対象に意識を向けるというニュアンスを
含んでいるのですね。

② 生徒B…苦痛をまなざす者、つまり〈物語〉を「聴く」人の態度を筆者は繰り返し説いて
います。その一つは、語る人の〈語る〉ことが〈聴く〉ものの存在にどうしても
影響されることはもちろん、語られた物語が結果的に現実と異なることすらあ
ることを注意するべきというものでした。

③ 生徒C…語る人が、言語にすることでその意味が誤って伝わると考え、あえて言葉にしな
いことにも意識を向けよと筆者は言っています。「語る」という形での言語化が
精神的に厳しい場合は、書くという行為を通して言語化することが有効になる
ということでした。

④ 生徒D…一度〈語り―聴く〉ことがなされた話も、それを繰り返していくたびに、新たに
語られること、以前は語られたのに語られなくなったことが出てくることは必
然であり、その都度、語られなかったことにも意識を向けていかないといけない
ですね。

⑤ 生徒E…語る人と聴く人が分かち合っているのは「無」だということは一見悲しいことに
思えますが、悲しい出来事の記憶には語りえないものがあるということをお分か
ち合えたという意味で、この認識こそが〈語り―聴く〉ことに大切な事柄だとい
えますね。

③ 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

河井道はアメリカのプリンマー女子大学に留学するため、その便宜を図ってくれた新渡戸稲造、その妻メアリ、新渡戸一家の養子（稲造の姉の息子）である孝夫らと船上にいる。

明治三十一年（二八九八）年七月、梅さんの生徒たちに見送られ、横浜から客船エンプレス・オブ・ジャパン号に乗って、道は新渡戸夫妻と孝夫ちゃん、新渡戸家の女中さんとともに北米へと旅立った。最初にその土を踏むのはカナダのバンクーバーだ。

太平洋を渡る二週間、道はとにかく暇だった。船酔いに慣れてしまうと、持ってきた本は全部読んでしまった。いくら新渡戸夫妻とはいえ、毎日会っていれば話題にも限界がある。道以上に退屈したのは孝夫ちゃんのように、いたずらを繰り返し、とうとう甲板を駆けまわって泣き出した。新渡戸先生もついに「X」 「暇だねえ」と顔を合わせる度に、気だるくぼやくようになった。初めてアメリカに渡ったのは二十二歳の頃で、今の道よりもずっと英語に不慣れだったから、最後の追い込みの勉強をしていて退屈する暇がなかったのだという。

「やることがないというのは、こども辛いものなんだねえ」
いつになく、ため息まじりに肩を落とす先生を見て、

「新渡戸先生、せっかくだから、何か書いたらどうですか？」
道はそう提案してみた。

「論文やら手紙やらは、日本にいる間にあらかじめ書き上げてしまったよ」

^a 新渡戸先生が頬を膨らませる。そうすると孝夫ちゃんによく似ていた。

「じゃ、今度は英語で書いてみてはどうでしょう。アメリカ人向けの、日本のことを知ってもらうためのガイドブック、なんてどうでしょうか？」

アメリカ人と親しくなった時に、これさえ読めば日本がわかるわ、と気軽に差し出せる、薄めの書物があればいいな、と思っていたのだ。日本について英語で書かれたものといえば、小泉八雲の本が有名だが、神秘の色合いが濃くて、現実の日本とは大きくかけ離れている。新渡戸先生は、ほう、それはいいね、と頷いて、それからは何かある度にメモを取り出して、Y 書き留めるようになった。

毎日変わらない真っ青な大海原を道はぼんやり眺めた。いつか身近な誰かがアメリカに渡ることがあったら、船の上はとてつもなく暇だということを、真先に教えてあげなければならない、と胸に刻んだのである。

そんなわけで、夏の夕方のバンクーバーの港がようやく見えた時は、ついに来たという感動より、安堵の方がずっと大きかった。港に降り立つと、東京の比ではないほど高い建物が立ち並び、道を見下ろしている。頬をスツと斬りつけるような乾燥した空気、沈んでいく夕日さえ、サラサラと白っぽく眩しかった。行き交う人々の多くは背が高く肩幅があり肌は白いけれど、髪と目の色は人によって全く違う。彼らがゆったり振る舞うのに比べ、黒い肌をした男女は貧しい身なりでいつも忙しそうに立ち働いていた。

d くぐりつとすると強い香水と、焦げた肉と冷えた柑橘類が混ざったようなにおいが、どこに行っても漂っている。

その夜、海辺のホテルに着くと、道たちはまず小部屋に通された。背後で扉が閉まるなり、空間全体がガタガタと震え出し、上方に引っ張り上げられていくので、道は孝夫ちゃんを抱きしめて悲鳴を

あげた。三階で扉が開くと、道たちは吐き出された。新渡戸家は三人部屋、道はその隣の一人部屋へと、荷物運びに案内された。部屋に着いたら、道は真つ先に窓を大きく開け、そこに広がる夜景に息を呑んだ。光の洪水が海辺の闇を大きく切り開いていたのだ。

「何を見ているんですか」

後ろからそう問いかけられ振り向くと、新渡戸先生が孝夫ちゃん、女中さんと一緒に、道の残りの荷物を部屋に運び入れてくれているところだった。

「綺麗。夜なのに、こんなにも明るいなんて……。まるで魔法です。カナダって、どこもこうなんですか？」

プリンマーのランタンの光の海もこんな具合なのだろうか、と道は思いを巡らせた。

「どうしてこんなに街が明るいと思いますか？」

新渡戸先生は孝夫ちゃんを連れて、隣にやってきた。道は通りにしばらく視線を落とし、身を乗り出して指差した。

「あ、ガス灯がある。それもこんなにたくさん!!」

道路脇に佇むガス灯の先端には小さなガラス箱が付いていて、青い炎が揺れていた。同じものが等間隔で配置され、海岸線沿いにどこまでも続いている。孝夫ちゃんも、お星様だ、あっちにも！と叫んだ。もちろん銀座などで目にしたことはあるが、一度にこんなにたくさんさんのガス灯を見るのは生まれて初めてだった。

「ねえ、道さん、提灯と街灯、どっちが安全だと思いますか？」

いきなり場違いな日本語が出てきて、道は

Z。

「そうですね、断然、街灯ですね」

「どうしてそう思いますか？」

「提灯は夜道でうっかり転んだ時に、火が燃え広がるし、誰かに奪われる可能性もあるし、紙が破けたりもします。それに片手しか使えないのは、足場の悪いところでは命取りです」

ローズさんを迎えに行ったあの暗い雪道や、父と参拝した伊勢神宮が蘇った。新渡戸先生はにっこりした。

「その通りです。では、提灯がそんなに危険なのに、私たち日本人が手放せないのは、どうしてでしょう」

「うーん……。なんででしょう?」

「それは個人が負わなければならぬ荷物のとても大きな社会だからです。日本人は全てにおいて、何か問題が起きたら、まず一人でなんとかしなくてはいけない。例えば家族に問題が起きた時は、家族だけで解決しないといけない。そんな風に思い込まされていませんか？」

一族の恥だから——。幼い日によく聞いた父の口癖を思い出し、道は、あ、と声を漏らした。

「だから、みんな暗い夜になると、自分の手元だけは明るくしなければ、と必死に提灯を握りしめるしかないのです。でも、自分と家族だけを照らしているようではまだ充分とはいえない。あんな風に大きな光を街の目立つところにもとして、みんなで明るさを分け合わないといけない。日本人は共同で何かを行うということを感じるべきです。つまり、シェア、ということですよ」

「シェア……」

もちろん知っている言葉だったが、こうして溢れんばかりの灯りを眺めていると、舌の上から光が広がり、唇からこぼれていくような気がした。新渡戸先生はじつと夜景を見下ろしている。

「提灯のように個人が光を独占するのではなく、大きな街灯をともして社会全体を照らすこと。僕は

道さんにそんな指導者になつてももらいたいと思つて、どうしても欧米の夜景を見て欲しかったのです。日本ではまだ教育や情報は一部の知識層が独占している。でも、それではダメだ。お互いが助け合い、持っているものを分け合わないといけない。学ぶ機会のない人にまで行き渡らないと意味がない。アメリカではごく普通の人たちでさえ、損得抜きでお互いを助け合います。日本でも今、学校がどんどん出来ていますが、学生は成績を競うばかりだ。この f シェア の精神が行き渡らない限り、夜はずっと暗いままです」

青白い光を浴びて道行く人々はみんな堂々と、目的地に向かって自信をもって歩いていくように見えた。その人工の無数のきらめきは、夜空にまたたく星よりも、道の心を貫き、深いところにまで光を届けた。

どうしてクリスマスがあんなに好きなのか。道はその時、初めて理解した。お盆やお正月とは大きく違う。そうだ、クリスマスは全ての人に開かれたお祝いなのだ。家族だけではなく地域や貧しい人、まだ会ったことのない誰かの方を向いている。クリスマスツリーの輝きは道行く人をも照らし出すから、あんなにも眩しい。そこに根付く精神が、道の心を満たしたのだった。 C 新渡戸先生は急に話を換えた。

「私の授業には批判があるんですよ」

「え、なんで？ とつても面白くてわかりやすいのに！」

「ええ、まさにそこが批判されています。誰にでもわかるような教え方や明快な話し方なんて深みがない、と嫌がる人もいます。 g チアフル、つまり明るいということを日本人は見くびる傾向にありませんか？ 暗いこと、苦しい、悲しいこと、いわば暗闇を一段高く見る傾向が蔓延 まんえん している。それで、辛い目に遭っている人たちが尊重され、救済される社会ならば僕は構わないんですが、かえって暴力や貧困、無知からくる争いが、変えようがない仕方のないこととして、放置され、我慢が当たり前になつているように思います」

ほの暗い神社の帰り道、バラバラになつた河井家、寄宿舎の暗黙の決まりごと、男たちの無言の二ヤニヤ笑い、 注4 有島 ありしま さんが道の前向きさを責めること、梅さんと 注5 捨松 すてまつ さんを引き裂いたときたり。そういうえば、これまでの人生で胸に引つかかかってきた問題は全て、納得のいかないモヤモヤとした理由で曖昧にぼやかされていた。あれらを全部、道が大きな光を持ち込んで、くつきり照らしてしまったらどうだったのだろう。全部取るに足らないどうでもいいことばかりで、誰かの人生を阻む理由にはならない、とみんな気付いたのではないか。道は物事をやさしく、とつつきやすくすることに關しては昔から長 なが けているのだ。

「道さん、これだけ明るいのですから、どうですか？ D メアリーも呼んで、 みんな で夜の散歩に出かけませんか」

道は頷き、孝夫ちゃんは躍りあがった。荷ほどきして寝巻きに着替えたなら、今日という日はもうおしまいとばかり思っていた。新渡戸先生がステッキを一振りして、孝夫ちゃんの手を引くと、先に部屋を出て行った。

急に道の中でムクムクと、人生に対する信頼感が膨らんできた。夜がこんなに明るければ、緊張で眠れないことも、異国でひとりぼっちになることも、時々ふと襲ってくる焦りも、怖くはない。

普段ならそろそろ寝ようかという時間なのに、カナダ最初の夜、道はどこまでも歩いて行けそうな気持ちで、ドアを大きく開けたのだった。 (柚木麻子『らんたん』小学館による。)

(注) 1 梅さんの生徒たち——道の友人である津田梅(津田梅子)の開校した女子英学塾の生徒たち。

- 2 ランターンの光の海——プリンマー女子大のランターン（西洋の提灯）を使った行事の光景。道はかつて、プリンマー女子大に留学していた梅からそのような行事があることを聞いていた。
- 3 ローズさん——道が通う札幌の女学校に赴任してきた女性。
- 4 有島さん——後に作家となる有島武郎。道が札幌にいたころ、新渡戸家で出会っていた。
- 5 捨松さん——梅の友人であり、一緒に留学した女性。捨松が結婚した伯爵家には、伯爵夫人は仕事を持ってはならない”という決まりがあり、梅は一人で女学校を作ることになった。

問1

傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①

⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。

19、

20、

21

(ア) 気だるく

19

- ① 心の底から嫌そうに
- ② 気を紛らわせるように
- ③ 何となく疲れたように
- ④ 疲れ果ててしまったように
- ⑤ 不快さが伝染するように

(イ) 安堵

20

- ① 安閑
- ② 安心
- ③ 安息
- ④ 安寧
- ⑤ 安樂

(ウ) 息を呑んだ

21

- ① はっと驚いた
- ② 深く感動した
- ③ 我が目を疑った
- ④ 恐怖で息を止めた
- ⑤ 喜びがあふれた

問2

空欄

X

・

Y

・

Z

⑤の中から一つ選びなさい。

22

に入る表現の組み合わせとして最も適当なものを、次の①

- | | | | | |
|-----------|---|---|---|---|
| ① X 辟易して | Y | Z | Z | Z |
| ② X 耐え切れず | Y | Z | Z | Z |
| ③ X 音を上げ | Y | Z | Z | Z |
| ④ X 繰り返し | Y | Z | Z | Z |
| ⑤ X 雀躍して | Y | Z | Z | Z |

問3

傍線部A「あ、と声を漏らした」、傍線部B「舌の上から光が広がり、唇からこぼれていくような気がした」とあるが、これらからうかがえる道の様子を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

23

- ① 新渡戸先生が提灯の比喻で話そうとしたことに得心し思わず声をあげてしまい、さらには今後どうするべきかという方向性まで示され、改めて先生の偉大さに感嘆している。
- ② 新渡戸先生の提灯の話は、「一族の恥」という父の言葉を思い出させる耐え難いものだったが、その真意が道の人生に光を示そうとするものだったと理解し前向きになっている。
- ③ 新渡戸先生が提灯に仮託して話そうとしたことが最初は理解できないでいたが、シエアの精神が大事であるということだと正しく理解でき、先生の話の深さに心打たれている。
- ④ 新渡戸先生の話で幼い頃の父の厳しい言葉を思い出し思わず声を出してしまった一方、先生のいう「シエア」という言葉に、目の前の街灯のような明るさを感じ取っている。
- ⑤ 新渡戸先生の提灯の話聞いて、かつては単なる口癖だと思っていた父の言葉の背景を想起したうえ、今後についての気づきを与えてもらったことで新たな希望を見出している。

問4

傍線部C「新渡戸先生は急に話を換えた。」とあるが、これはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

24

- ① 提灯と街灯の話に理解を示した道に、自分の授業に対する批判の話をする一方で、日本には共同の精神以外にも欠如した考えがあることを理解してほしかったから。
- ② 留学経験者でもある自分は道にとっては先生かもしれないが、日本社会に残るさまざまな悪習の中では、浮いた存在でもあることをわかってほしかったから。
- ③ シエアの精神が不足した日本の現状を示すため提灯の話をしたのに、クリスマスというお祝い事に話を飛躍させている道の浮かれた様子を論そうと考えたから。
- ④ 提灯の話はしたが、それでは道の理解が不十分なことを教育者の聡明さから察し、さらに話題を追加して道が教育者になる決意の後押しをしようと思ったから。
- ⑤ 留学の熱に浮かされている道に、日本社会に残る悪弊の話を重ねてすることで、新しい思想・思考を日本社会に根付かせるといふ初心に立ち返ってほしかったから。

問5 傍線部D「みんなで夜の散歩に出かけませんか」とあるが、この呼びかけによって、道ほどのような気持ちになったか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

25

- ① 河井家や寄宿舎では古いしきたりにとらわれていたが、新渡戸先生が示してくれた先進的な考え方に触れ、失いかけていた人生への希望を取り戻したような気がしている。
- ② いずれ自分も日本に帰国し、日本から悪習を払拭して「みんなで夜の散歩」ができるような社会にするのだという人生の目標を、今後も貫いていく自信に満ちあふれている。
- ③ みんなで夜の散歩をするという日本ではできない経験ができることに心が躍り、自分はこのからの人生を明るく切り開いていけそうな予感を抱いている。
- ④ 「みんな」で「歩く」ことも「夜の散歩」をすることもままならない日本ではなく、アメリカで学ぶため国を発つた自分の選択は誤りでなかったと、自負心でいっぱいになっている。
- ⑤ 新渡戸先生や梅さんのように、日本を変えようとしてきた先駆者の努力を改めて実感するとともに、彼らの信頼に応えられるような人間になろうと覚悟を決めている。

問6 波線部a～gの内容や表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

26

- ① a「新渡戸先生が頬を膨らませる」は、いかに暇を持て余しているとはいえず、これから大で学ぼうとする若い人間が、すでに留学を経験している自分に意見するという無礼にひどく立腹している様子を表している。
- ② b「真つ先に教えてあげなければならぬ」からは、道が留学に向かう途上において既に、帰国後は梅の開校した女学校に赴任し、後進の女性の指導にあたらうという強い意志を持っていることがうかがえる。
- ③ カナダの夕日を描写する際はc「サラサラ」と片仮名を、強い香水の香りに道が抱いた印象を形容する際にはd「くらっと」と平仮名を用いるという区別をすることで、道が北米の地で感じている衝撃を印象深く伝えようとしている。
- ④ e「道路脇に佇むガス灯」は、道が接した文明の圧倒的な力を表すと同時に、日本から遠く離れた北米の地で、人生の目的地に向かって歩く道の視界に光を与え、心を照らす象徴として用いられている。
- ⑤ f「シエアの精神」、g「チアフル」といった英単語を使っている描写には、それらに該当する単語、ひいては精神が現状の日本には欠落していることや、そういった日本の環境で新渡戸がこれまでいかに苦しんできたかが暗示されている。